

ガッツ

2022. 4. 25

子どもの頃は、お腹が痛くなることがあった。それが、大人になってからはなくなった。これは私の場合であり、人によって違う。個人差がある。よく「胃の調子が」と言ったりする。神経性胃炎というものもある。どうも精神状態と胃や腸は連動しているように思える。最近になって分かったことだが、脳科学の研究により、脳と腸は直接つながっていて、腸が感情を司る重要な機関であることが分かってきたそうである。やっぱりそうだったのか。

肝が据わっていたり、根性があることを「ガッツ」と言うことがある。このガッツというのは、英語で腸のことを指すのだそうだ。なるほどである。洋の東西を問わず、人間は昔から肝を鍛える大切さが分かっていたのだろう。

学校で働いていると思うことがある。若い人にもう少しガッツがほしいと。今の若い人には特にぐっと腹に力がこもるような胆力をもっと鍛えてほしいと思う。器用でマナーも知っていて、真面目な人は増えている。だが、一方でガッツというか、精神の強さ、勇猛心をもっと抱いてほしいと感じることもある。

若者がわるいわけではない。時代が世の中が若者を育てている。その結果である。若いうちは、尖っていてもいい。若いうちに苦労し、荒波に揉まれる過程で、角が取れて円熟した人生が送れるようになればよい。

ところが、今は尖っていると嫌われたり、下手をすると排除される傾向がある。世の中が尖っているタイプを生かし切れていない。これでは、社会の活力がどんどん失われていく。これは、学校という教育の現場でも同じである。

自分の経験によると、尖ったタイプのことは、尖っていた人でないと扱えない。うまく支援できないように思う。私自身は尖っていたので、尖った若者のことは大歓迎である。若者はちょっとぐらい尖っていた方がよい。それが可能性や人間的な魅力にもつながる。

今は、平気で躊躇なく「ノー」「いいえ」「いやです」という言葉を発する若者が増えてきたように思う。大丈夫なのだろうか。自ら自分の可能性を閉ざしているようなものである。わざわざ苦労しないように、大変なことから距離を置いている。それが許され、それが良しとされる風潮なのかもしれない。

確かに、昔のようにはいかないとは思いますが、チャレンジ精神、向上心、そしてガッツがないと、自分の人生を切り拓いていくことは難しいのではなかろうか。若いうちに苦労をしなければ、後で困るように思う。

こんな話をしても多くの若者は納得をしないだろう。尖った方がよいと言われて尖ることができるわけでもない。どうしたらいいのか明確な答えがあるわけではないが、若者との接し方によっては、少しはガッツが身につくように思う。そのことを若手教員たちが教えてくれている。